

2. 突帯文土器の分類と変遷

縄文時代晩期後半には、各地で口縁部や肩部に突帯を巡らす突帯文土器が盛んに用いられるようになる。近畿における突帯文土器としては、滋賀里IV式、船橋式、長原式の土器型式が設定されている。これらのうち、当調査区から大量に出土した長原式土器は、特に大阪府の中東部にあたる中河内に集中する他、近畿の中央部に広く分布する型式である。

長原式を中心とする突帯文土器の分類と編年については、家根祥多（家根1981・1982・1984）、松尾信裕（松尾1983）、泉拓良（泉1990）、田中清美（田中2000）氏をはじめとする先学によって研究が進められてきた。さらに近年は、地域ごとに詳細な分析が試みられており、その実態が明らかになりつつある。この節では、これまでの研究を基に、当調査区出土資料の様相を加えて検討したい。

近畿において、突帯文土器の最終段階に出現する長原式土器の変遷を追うことは、突帯文土器と弥生土器という系譜を異にする土器のあり方の問題を含め、縄文から弥生時代への移行期の状況を把握するための大きな手がかりになるとと考えられる。

1) 突帯文土器深鉢の分類基準（図113・114）

分類は、長原式深鉢の時期的な特徴を示す器形、口縁部の突帯貼付位置、突帯断面形状、突帯刻目形状の4項目を設定しておこなった。まず、器形については、口縁部と肩部に各1条の突帯をもつものをA類、口縁部にのみ1条の突帯をもつものをB類とした。A類は1～4に細分した。A-1類は底部から内湾気味に開いて肩部で屈曲し、頸部は外湾して口縁部にいたる。先行する船橋式の伝統を残すもので、器壁は厚く、器高と胴部最大径の差が少ない安定した器形といえる。A-2類は胴部の内湾が弱まり、肩部でゆるやかに屈曲し、頸部は内湾または内傾する。器高が高く全体に不安定である。A-3類になると頸部がほぼ直立して口縁部にいたる。A-4類は底部から外上方にまっすぐに開いて口縁部にいたるもので、口縁部に最大径をもつ。

次に、A-1～4類と外形の対応するものとしてB-1～4類を分類した。このうち肩部で強く屈曲し頸部が外湾して口縁部にいたるB-1類については、主に滋賀里IV式に丸底のものが、船橋式に平底のものがみられるが、長原式の段階では基本的には製作されなかったといえる。そのため長原式土器としては、球形を呈するB-2類、半球形を呈するB-3類、底部から外上方にまっすぐに開いて口縁部にいたるB-4類の3種の器形が製作されていたと考えられる。

A・B類にみられるような器形の変遷は追えないものの、この他にC・D・E類を分類することができる。C類は口縁部に2条の突帯をもつもので、このうち主流は肩部にも2条の突帯をもつ器形とみられる。D類は突帯を口縁端部から少し下げて貼り付け、尖り気味の口縁端部に刻目を入れるものである。滋賀里IV式に類似した器形がみられるが、滋賀里段階の突帯文土器は器壁が厚く、口縁端部を面どりするなど、D類と土器の様相が異なり、今のところ直接的なつながりは見出しつらい。また、E類は口縁端部から1cm以上下がった位置に突帯を貼り付けるものである。突帯頂部の位置でみれば、口縁端部から1.8～2cm程度下がるものが多い。また、口縁端部は丸くおさめている。E類は家根祥多（家根1995）氏が、鬼虎川・水走遺跡出土の一群の土器を、長原式に後続する「水走」とされたものの一部に相当する。近年、「水走」は「水走式」や「水走段階」と称されることもある。今回の分類では、これらを一型式または典型的な長原式土器に連なる一段階としてではなく、形態の違いととらえているた

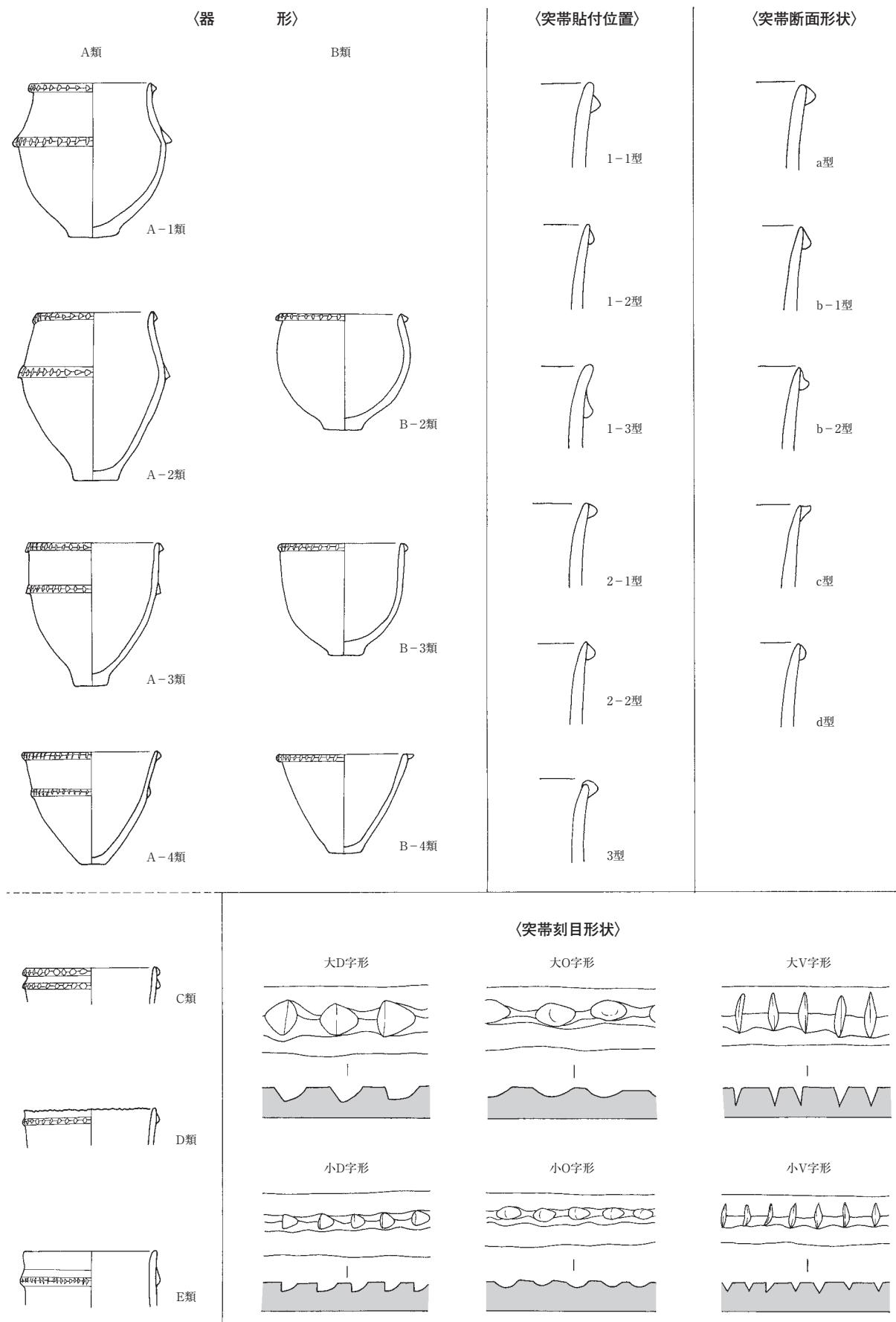


図113 突帯文土器の分類

め、別に器形E類を設定し、仮に「水走タイプ」と総称する。

次に突帯の各要素について分類する。口縁部の突帯貼付位置については、口縁端部と突帯の距離によって1～3型に分け、その中をさらに細分した。1型は突帯を口縁端部から下がった位置に貼り付けるもの、2型は口縁端部上端に接して貼り付けるもの、3型は口縁端部の上面にかぶせて貼り付けるものである。1型のうち、突帯を口縁端部から0.6cm程度下げて貼り付け、口縁端部が丸くおさまるものを1-1型、突帯を口縁端部から0.1～0.4cm程度、不規則に下げて貼り付け、口縁端部が薄く尖るものを1-2型、口縁端部から突帯まで1cm以上下げる貼り付け、口縁端部が丸くおさまるものを1-3型とした。同じく、2型のうち、口縁端部が丸くおさまるものを2-1型、口縁端部が薄く尖るものを2-2型とした。このうち、突帯貼付位置1-1型は船橋式の特徴であり、長原式にもその伝統を引くものが残る。また1-3型は器形分類のE類に伴う特徴である。1-2型は口縁端部上端に突帯を沿わす意識がなくなり、粗雑な貼り付けによってずれ下がったもので、突帯の形骸化の段階に出現するといえる。

突帯の断面形状については、上下面からの均等なナデで正三角形を呈するa型、上面からの強いナデで下向きの三角形を呈するb-1型、さらに上面がくぼむものをb-2型、下面からの強いナデで上向きの三角形を呈するc型、表面全面へのナデでかまぼこ形を呈するd型とした。これらは口縁部に断面正三角形の突帯を正確に貼り付ける段階から、口縁部の調整と突帯貼り付けの調整を同時にこなす簡略化の過程で、b・c・d型がみられるようになる。このことは、突帯貼付位置における1-2型、2-2型、3型のあり方と有機的に関連するといえる。

突帯の刻目形状については、刻目の平面形と断面形をもとに分類した。断面方形の工具もしくはヘラ状の工具で刻み、刻目断面がほぼ直角三角形を呈するものをD字形、断面円形の工具を押し付けるか、もしくはヘラ状の工具をすべらせ、刻目断面が半円形を呈するものをO字形、工具を立てて鋭く刻み、刻目断面が鋭角的な二等辺三角形を呈するものをV字形とした。そのうえ、0.7cmに基準を設け、刻目の縦もしくは横の長さが0.7cm以上のもの大、未満のものを小とした。従来D・O・V字形と称していたものは、おおむね大D・O・V字形となる。その他に刻目を省略したものを無とした。

また、底部の形状については、丸底をA類、平底をB類とした。A類には底面が尖底に近いA-1類、半球形に近いA-2類がみられる。B類は底面がやや丸く突出するB-1類、底面に粘土円盤を貼り付けるB-2類、底部側面が不整形に張り出したのち、外上方に立ち上がるB-3類、外上方に直線的に立ち上がるB-4類に細分した。このうちB-3類が長原式の主流となる底部であり、量的にも最も多いとみられる。B-4類はより形態的に洗練されており、弥生土器甕の影響を受けたものといえる。B類の底部外面は弥生土器の底部と異なり、縦上方に向けて強いヘラケズリで調整されている。また、底面の器壁が薄く凹面をなし、やや外上方に円筒状に立ち上がる底部（図83-4）については、突帯文土器にともなう可能性も考えたが、縄文時代後期の包含層である第15-3b層から出土していることも含め、突帯文土器出現以前の底部とした。



図114 底部形状

2) 突帯文土器深鉢の分類 一長原式を中心にー

①器形

A類：口縁部と肩部に各1条の突帯をもつ。

A-1類：底部から内湾気味に開いて肩部で屈曲し、頸部は外湾して口縁部にいたる。

A-2類：底部からやや内湾気味に開いて肩部で緩やかに屈曲し、頸部は内湾もしくは内傾して口縁部にいたる。

A-3類：底部からやや内湾気味に開き、頸部はほぼ直立して口縁部にいたる。

A-4類：底部から外上方にほぼまっすぐに開いて口縁部にいたる。

B類：口縁部に1条の突帯をもつ。

(B-1類：底部から内湾気味に開いて肩部で屈曲し、頸部は外湾して口縁部にいたる。)

B-2類：底部から緩やかな球形をなして口縁部にいたる。胴部上半部やや内湾する。

B-3類：底部から緩やかな半球形をなして口縁部にいたる。胴部上半はやや直立する。

B-4類：底部から外上方にほぼまっすぐに開いて口縁部にいたる。

C類：口縁部に2条の突帯をもつ。

D類：口縁部に1条の突帯をもち、口縁端部に刻目を入れる。

E類：口縁端部から大きく下がった位置に1条の突帯をもつ。

②突帯貼付位置

1型：口縁端部から下がった位置に貼り付ける。

1-1型：少し(0.6cm程度)下がる。

1-2型：わずかに(0.1~0.4cm程度)下がる。

1-3型：大きく(1cm以上)下がる。

2型：口縁端部上端に接して貼り付ける。

2-1型：口縁端部は厚めで、丸くおさまる。

2-2型：口縁端部は薄く、先に向かって尖り気味になる。

3型：口縁端部の上面にかぶせて貼り付ける。

③突帯断面形状

a型：上下面からほぼ均等にナデて貼り付ける。断面は正三角形に近い。

b型：特に上面から強くナデて貼り付ける。

b-1型：断面は下向きの三角形になる。

b-2型：断面は上面がくぼむ。

c型：特に下面からナデ上げて貼り付ける。断面は上向きの三角形になる。

d型：突帯表面全面をナデる。断面はかまぼこ形に近い。

④突帯刻目形状

D字形：断面方形の工具もしくはヘラ状の工具で刻む。刻目断面はほぼ直角三角形を呈する。縦もしくは横の長さが0.7cm以上を大D字形、未満を小D字形とする。

O字形：断面円形の工具を押し付けるか、もしくはヘラ状の工具をすべらす。刻目断面は半円形を呈する。縦もしくは横の長さが0.7cm以上を大O字形、未満を小O字形とする。

V字形：工具を立てて鋭く刻む。刻目断面は鋭角的な二等辺三角形を呈する。縦もしくは横の長さ

が0.7cm以上を大V字形、未満を小V字形とする。

無：刻目のないもの。

⑤底部形状

A類：丸底

A-1類：底面が尖底に近い。

A-2類：底面が半球形に近い。

B類：平底

B-1類：底面の器壁は厚く、やや丸く突出する。

B-2類：底面に粘土円盤を貼り付ける。

B-3類：底面の器壁はやや厚く、側面外方に張り出した後、外上方に立ち上がる。

B-4類：底面の器壁はやや薄く、外上方に直線的に立ち上がる。

3) 各分類の特徴と組み合わせ

長原式を中心とする突帯文土器深鉢を分類するとともに、各分類の特徴ならびに器形と突帯要素の組み合わせを考える。なお、当調査区出土の突帯文土器深鉢は、口縁部片（口縁部から肩部まで残存するものを含む）346点、肩部片307点、底部片86点で、部位の判明した破片の総計は739点である。

①器形

口縁部と肩部片の計653点のうち209点について器形分類が可能であった。肩部片を加えて各器形の点数を出すとA・B類の比率が実態と異なるため、ここでは口縁部片346点のうち、器形を分類できる133点についてみていきたい。これによるとA類の総計は66点で、内訳はA-1類4点（3%）、A-2類17点（13%）、A-3類25点（19%）、A-4類20点（15%）となる。また、B類の総計は51点で、内訳はB-2類7点（5%）、B-3類11点（8%）、B-4類33点（25%）である。その他にC類4点（3%）、D類3点（2%）、E類9点（7%）がみられる（図120）。

深鉢の大きさについては58点の口径が復元できた。そのうち器形分類の可能な48点の口径は以下の通りである（図119）。ここで口径15.0cm以下を小型、25.0cm以下を中型、25.1cm以上を大型とすると、A類は63%が大型品に含まれる他、小・中型と各種の深鉢を製作していたことがわかる。それに対し、B類は全てが小・中型となる。特にB-4類には何らかの規格があり、A-4類とは機能が異なっていた可能性がある。この段階における浅鉢の減少も含め、弥生土器の組成の影響を受けていたと考えられる。また、C類は肩部にも突帯を巡らす大型の深鉢であったとみられる。

②突帯貼付位置（図115）

A-1類のすべてが口縁端部上端に接して突帯を貼り付ける2-1型である。船橋式を脱却して長原式特有の器形となるA-2類では、口縁端部が尖り気味の2-2型が多くみられる。A-3類にいたると、さらに2-1型が少なくなり、2-2型が70%近くを占める。突帯の貼り付けが粗雑な1-2型や突帯が口縁端部にかぶる3型も出現する。この組み合わせの比率はA-4類に引き継がれている。また、B類においても同様に2-1型は少なく、2-2型が過半数を占める。B類は突帯の形骸化が進んだ1-2型の割合が高いという特徴がある。その他にC類は2-2型、E類は1-3型と組み合わされる。なお、D類について分類上では1型に属するが、今回は統計に入れていない。

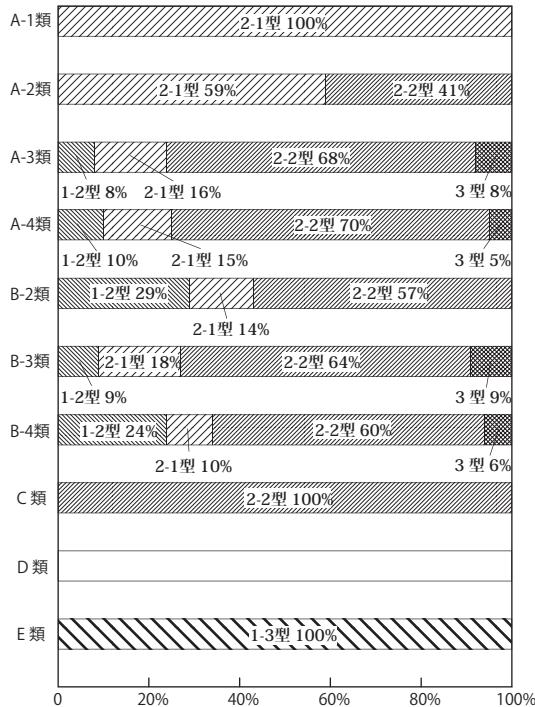


図115 器形別の突帯貼付位置（口縁部）

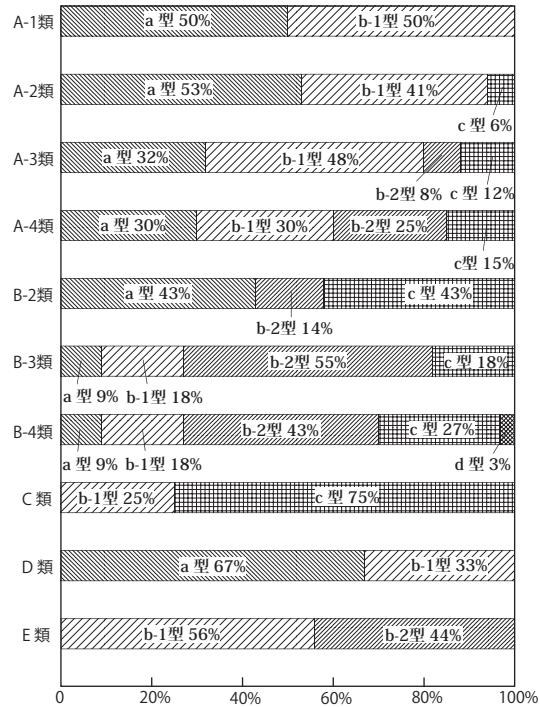


図116 器形別の突帯断面形状（口縁部）

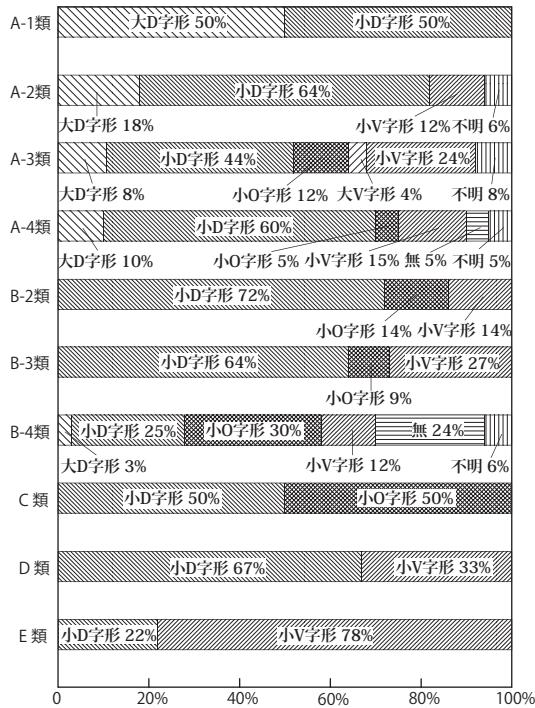


図117 器形別の突帯刻目形状（口縁部）

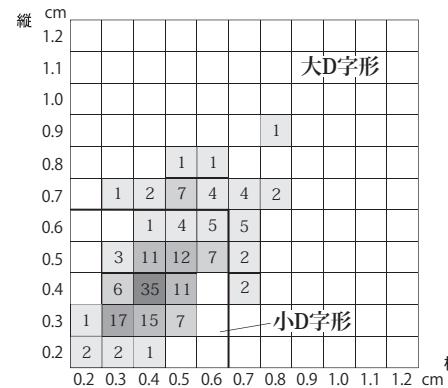


図118 突帯大・小D字形刻目の大さ（器形不明分を含む全口縁部）

A-1類					1	
A-2類		1		1	2	1
A-3類			1	2		1
A-4類		1	1		2	5
B-2類	1	1	2	2		
B-3類	1	1	2	2		
B-4類	2	3	7	3		
C類					1	1

器形	5.1	10.1	15.1	20.1	25.1	30.1	35.1
口径cm	~10.0	~15.0	~20.0	~25.0	~30.0	~35.0	~40.0

図119 器形別の口径

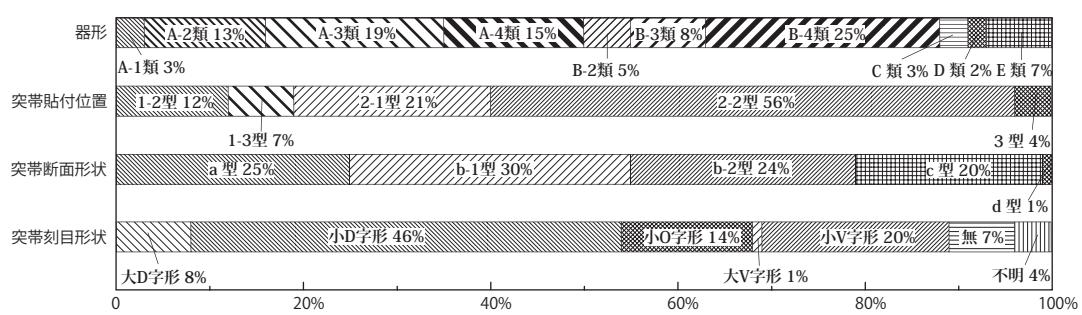


図120 器形・突帯貼付位置・突帯断面形状・突帯刻目形状（口縁部）

③突帯断面形状 (図116)

A-1・2類では断面が正三角形に近いa型と下向きの三角形のb-1型がほぼ同数みられる。A-3類ではb-1型がa型を上回り、さらに形骸化したb-2型やc型がみられるようになる。A-4類になるとb-2型とc型の比率がさらに増える。B類では全体的にみて下面からナデ上げて、上向きの三角形を呈するc型の占める割合が高い。B-2類ではa型とc型が同数でこの器形の特徴を示す。B-3類ではb-2型が過半数を占める。最も出土点数の多いB-4類は粗雑なナデ調整のため断面形が歪んだb-2型とc型が主流となる。また、かまぼこ形の断面をなすd型が出現する。C類はc型が多い。D類は口縁端部断面は尖るものa型の多い点が注目される。E類は突帯上面からの強いナデによりb-1・2型となる。

④突帯刻目形状 (図117)

A-1類では大D字形と小D字形がみられる。大O字形は船橋式に多く、04-2調査区からは器形不明肩部片の中に3点存在している。A-2類になると大部分が小D字形となる他、大D字形も残り、小V字形が出現する。A-3類では小D字形を中心に、小O字形や小V字形など各種の刻目形状がみられる。A-4類になると過半数が小D字形で刻目は小型化していく。刻目の間隔の狭い小D字形および小V字形は弥生土器甕の刻目の影響を受けている可能性が考えられる。B類では、B-2・3類は同様に小D字形が主流で、小O・V字形も一定量みられる。B-4類には各種の刻目形状がある中で、小O字形の多さが目立つとともに、刻目を入れない一群が含まれている。C類は小D・O字形、D類は小D・V字形がみられる。E類は小V字形もしくは横幅の狭い小D字形の刻目を入れるという特徴をもつ。

刻目の大きさについては、器形不明分を含む全口縁部の突帯刻目D字形でのあり方をみた(図118)。それによると、大D字形が32点、小D字形が140点であった。大D字形については、大・小の基準とした縦・横0.7cmに一定量の集中がみられる。小D字形では縦・横0.4cmに分布の中心がある。また、器形不明分を含めた全肩部の突帯刻目D字形をみると、小D字形128点は口縁部同様に、縦・横0.4cmに中心があるが全体にやや大きい。大D字形34点も大きく、口縁部突帯ほどの統一性はみられない。

⑤底部形状

底部86点のうち丸底A類は12点と全体の14%である。A-1類は5点(6%)、A-2類は7点(8%)である。これに対し平底B類は74点で全体の86%と大部分を占める。B-1類は1点(1%)、B-2類については浅鉢の底部(図78-4)が出土したのみで、深鉢の出土はみられなかった。B-3類は51点(59%)、B-4類は22点(26%)である。丸底A類は滋賀里IV式～長原式の深鉢にともなうもので、底部のみでは時期が確定できない。平底B類については、B-1類は底面が丸く不安定な、B-2類は粘土盤の底面をもつ安定した底部といえる。B-3類が典型的な長原式の底部である。B-4類は強いヘラケズリ調整が残るが、形状は弥生土器甕の底部に近い。

底部B-3類とB-4類のうち底径が復元できた69点について比較すると、B-3類は79%が5.6～7.5cmに集中し、B-4類は82%が5.1～6.5cmに集中する。B-4類がより洗練された形状を呈するためもあるが、全体的に小型化の傾向にあるといえる。

4) 突帯文土器深鉢の変遷

船橋式の系譜を引く長原式深鉢がしだいに弥生化する器形の変化を基軸とし、これに、簡略化・粗雑化・形骸化していく突帯各要素の変化を組み合わせて、その変遷を検討する。

①器形A類・B類の変遷

船橋式の伝統を残し、長原式の古い様相を示すA-1類を長原式古相、典型的な長原式の様相を示すA-2類およびA-3類を長原式中相、弥生土器甕の影響を受けて、長原式の新しい様相を示すA-4類を長原式新相ととらえる。B類についても同じく、B-2類およびB-3類を中相、B-4類を新相とする。器形A・B類においては、長原式の中で型式学的に土器の変遷を追うことができるが、実態としては、順次、新しい器形に変わるのでなく、時間的に一部併存していたと考えられる。

①器形と各要素の基本的な組み合わせ

まず、口縁部の突帯貼付位置については、A-1類に2-1型、A-2・3類に2-1型と2-2型、A-4類に1-2型と2-2型、一部3型がともなう。B-2・3類は2-1型と2-2型、一部1-2型、B-4類は1-2型と2-2型、一部3型が組み合わされたとみられる。E類は1-3型となる。

次に、突帯断面形状については、A-1類にa型、A-2・3類にa型とb-1型、A-4類にb-1・2型がともなう。B-2・3類はa型、b-1、2型、c型と各種の突帯が付く。B-4類は主にb-2型とc型が組み合わされる。E類はb-1型を中心にb-2型がともなうといえる。

また、突帯刻目形状については、A-1類には大D・小D字形、大O字形がともなうと考えられる。A-2・3類は小D字形を中心に大D字形、小O字形に一部大・小V字形が混じるとみられる。A-4類では小D字形を中心に、小O・V字形の小型の刻目が施される。B-2・3類は小D字形が中心で、小O・V字形の小型の刻目が多くともなう。B-4類は小D・O・V字形を施し、さらに刻目のないものも含まれる。E類は小V字形を中心に、細い小D字形の刻目がともなう。

底部については、底部B-3類が器形A-2・3類およびA-4類の一部、器形B-2・3類およびB-4類の一部にともなうと考えられる。また、器形A-1類には大型で安定した底部B-3類がともなうと推定できる。底部B-4類は主に器形A-4類、B-4類の底部であったとみられる。

5) 長原式突帯文土器にみる様相

①04-2調査区出土の突帯文土器 (図120・121)

当調査区出土の突帯文土器深鉢は器形分類可能な口縁部片133点のうち、長原式古相のA-1類が4点(3%)、中相のA-2・3類、B-2・3類が60点(45%)、新相のA-4類、B-4類が計53点(40%)となる。当調査区を生活域としていたのは長原式中～新相を中心とする時期と考えられる。

さらに、器形細分の不可能な口縁部片213点を加えた346点の突帯要素をみると、突帯貼付位置は1-2型が34点(9%)、2-2型が224点(65%)、3型が15点(5%)の計79%を占める。次に、突帯断面形状ではb-1型が147点(41%)、b-2型が84点(24%)、c型が44点(12%)、d型が19点(6%)

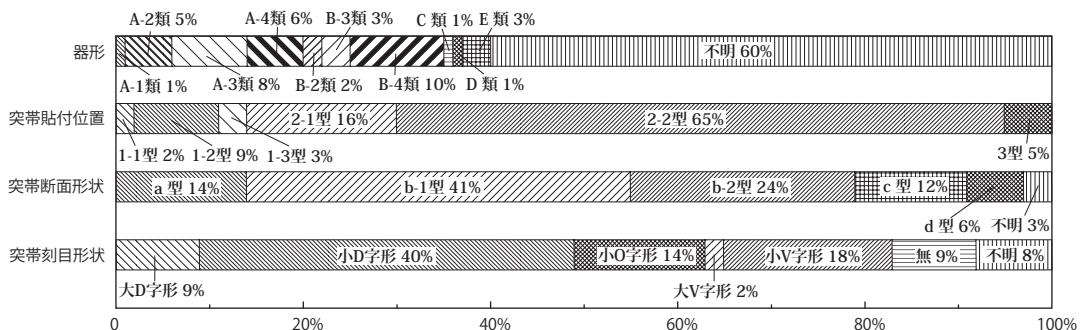


図121 器形・突帯貼付位置・突帯断面形状・突帯刻目形状 (器形不明分を含む全口縁部)

の計83%となり、突帶貼付位置と同様に、突帶の粗雑化段階の様相を呈しているといえる。また、突帶刻目形状は小D字形が140点（40%）で最も多く、小O字形が46点（14%）、小V字形が62点（18%）、無が33点（9%）と、長原式の新しい様相がみられる。これに、肩部突帶を加えた全ての突帶要素を総合すると、A-3・4類とB-4類を主流としていたことがうかがわれる。

なお、突帶文土器深鉢片のうち底部を除く口縁部と肩部片の計653点の中には、滋賀里IV式とみられる口縁部片1点、船橋式とみられる小片10点が含まれる。

②器形E類（「水走タイプ」）について

当調査区出土の突帶文土器を肉眼観察すると、一部の搬入品を除くほぼ全点が、角閃石を多量に含む暗茶褐色の典型的な生駒山西麓産、または生駒山西麓域の各地点の胎土で製作されたものとみられる。そのうち、特に器形E類（「水走タイプ」）9点について奥田尚氏の鑑定を受けたところ、当遺跡周辺および当遺跡から約5km南の八尾市恩智あたりの胎土であるというご教示を得た。

E類が突帶文土器の全口縁部片346点中わずか9点（3%）しか出土していないのは、他地域の土器もしくはその影響下に成立した土器を当地で製作したため、またはE類の盛行期とこの地の集団が当調査区を生活域とした時期とが異なるため、などの理由が考えられる。E類の成立に影響を与えた地域の候補としては、口縁部突帶の貼付位置、断面形状、刻目形状の類似する土器が広がる播磨や紀伊が考えられる。また、「水走」に分類される如意形口縁甕状の深鉢に顯著な弥生土器の強い影響も、E類の成立の背景とみることができる。今後の出土資料の増加とともにE類の細分をおこなうことにより、時期の問題を含めた変遷過程が明らかになるとみられる。

③弥生時代前期の様相

当調査区から出土した長原式突帶文土器口縁部片と前期弥生土器片を単純に合計すると、総数は9:1の割合となる。これらの突帶文土器と弥生土器は包含層、および時期差のある遺物を含む落ち込み・流路にみられた。また、この他には374土坑から削出突帶をもつ河内I-2様式の広口壺小片と器形E類の深鉢小片、486A土坑から長原式深鉢小片、486B土坑から河内I-2~3様式の高杯、366土坑からは河内I-2~3様式の土器棺と長原式深鉢の小片が出土している。しかし、出土状況から考えて、これらの土器は考古学的に共伴の範疇ではとらえられないものといえる。

このように、当調査区では突帶文土器と弥生土器の共存についての確証を得ることはできなかった。また、当遺跡においても、弥生前期中葉の段階に長原式中~新相の突帶文土器と河内I-2~3様式の弥生土器が共存するか否かは、今後の調査の進展とともに、考古学的な検証を経て結論を出すべきであろう。他方、突帶文土器深鉢の変遷からみると、ある程度の長い期間にわたり弥生土器の影響を受けていたと推定することができる。時間的な重なりの問題は別にして、当調査区を生活域とする在地の縄文系集団が、地元の胎土を用いて長原式突帶文土器を製作している中で、新たに伝わった弥生土器を取り入れて当地で製作を始めたことは想像に難くない。他地域または他集団との緊密な交流を通して、当地の縄文社会に水田稻作農耕を中心とする複合的な弥生文化が流入していく過程で、二系統の土器が併存していた可能性は高いと考えられる。（林）

（参考文献 p 172）